

町長随想

25

鹿追町長

土田 孝正

新春に想う

磅礴ほうはくとした中に希望と潤い漂う2010年、平和で豊に暮らすことを合掌の中に願わずにはられない思いは、私だけではな
いはず。

永く続いた政治態勢が変わり、国民の多くは期待と不安の中で迎えた新年であるが、それに確かな答えを出すことができるのは誰であろうか。それは、最後に私が決めると言って、はばからない総理であることは、間違いないところですが、地域の集まりが国家であり、地方主権を国づくりの基軸とするならば、地域である地方自治体の果たすべき役割は、ますます大きく、責任の大きさを自覚しなければならぬと新春に思う。

地方分権一括法が施行され10年を迎え、いま国から道へ、道から市町村へと事務権限が移譲されている。

昨年、我町でも現段階で受け入れ可能な

権限で、町民の皆さんに対し、プラスになると考えられる212項目について受け入れをすることとしました。

副町長を中心に各課長がよく検討しての受け入れであるが、結果としての212項目であり、その数が全道の市町村の中でもトップの多さということに少し驚いているが、北海道から職員の派遣を期待しての受け入れではない。

私は、自主自立の途は苦汁の中にこそ活路を見いだすことができ、改革の中にこそ、地方自治体の明暗を分けることができると考えている。

私は、この変革社会の中で、議会とともに職員のスキルアップを図り、力を結集して「生きて」（経済の活性化）「生きる」（福祉の向上）町づくりを一層前進させたいと願ってやまない。

